

視点・論点・ところてん

小学校英語教育、先駆的実践校の実状と課題

1. はじめに

前任校（千早赤阪村立赤阪小学校）は私が赴任した時には外国語活動（以下英語）の研究指定校として3年目を迎え、まとめの研究実践を行っている最中であった。前任校に転勤前の学校でも英語は行われていたが、ネイティブが主として進めていく形式で、ちょこっとお手伝いをしたり、子どもたちを動かしたりする程度の授業だった。しかし、転勤してみてもびっくり。そこは「担任英語」で授業を進めなければならなかったのである。

2、研究指定校の実状

千早赤阪村は幼稚園から小学校6年生まで毎週1時間英語を行っている。ねらいはコミュニケーションの力の育成。全ての学年で年間のシラバスが定められており、それをもとにして、毎時間の学習内容を担任が主で考えていく。

どの学年も毎週英語の時間があるので、ネイ

ティブと週に1度、放課後に次時の打ち合わせをして、流れを確認し、それを本時の前までにプリントアウトして、ネイティブに渡すという作業を行っていた。

また、学期末には、学期ごとの実践報告を決まった形式にまとめ、提出しなくてはならない。そして、校内研修で全学年英語の授業を行い、英語の授業力向上を目指していた。

研究指定校を6年間続けた後、外国語活動特例校の指定を受け（研究指定校のような3年間のまとめの研究報告などはないが、外国語活動に関する教育課程において1年生からでも英語を行ってよいとお墨付きをもらえるもの）、「やっぱり英語は外せない」という空気を生み出していった。

私は赴任した1年目は「とりあえず英語をやってみよう」と心に決め、言われたとおりに打ち合わせを行い、授業の流れを作成し、自分で

慣れない英語を話し、授業を進めていった。これが本当にきつかった。しかし、「必ずそれは力になるよ」という研究推進教員の言葉のもと、やめるにやめられない状況になっていたのは確かだった。「間違えても大丈夫」「子ども達と一緒に先生も学んでいけばいいよ」毎年、他市や他地区から転勤してきた先生に掛けられている言葉である。

3、担任英語の問題点

そもそも担任英語を進めてきた理由は、予算がないからである。グローバル社会に対応するための人材育成として、予算もつかないまま英語を話せる人材を作ることが急務としたことが担任英語に走らせてしまった。

週に1~2時間の英語のために、膨大な時間と労力が使われていく。小学校は英語だけではない。他教科も教えなければいけない中で、なぜ英語だけにそこまで時間をかけなければいけないのか？

担任の英語力向上という名目のもと、多くの研修や打ち合わせが入ることで、益々現場は時間が無くなっていく。膨大な仕事量の中、また新たに仕事が増えていく。

ALTやNTの能力や人間性にも左右されてしまう。英語なんて話せるわけがないと思っている教員と、日本語がたどたどしいネイティブと

の打ち合わせなど、考えただけでもうまくいくはずがない。疲れるだけで実りなどない。

4、英語教育を考える

そもそも英語を使えるようにさせたいのは誰なのか。そこを考えていかないと英語教育の問題点は語れない。

グローバル社会に対応する人材を作るために、公教育が人材育成の場に成り下がっている。教育とは人格の形成であるという崇高な理念はどこへ行ったのか。

コミュニケーション能力の育成という言葉もこれほど怪しいものはないと思っている。コミュニケーションは取られるものではなく、取りたいと思うものである。すべての子どもに対して週に1~2時間英語を行うことがコミュニケーション能力向上にどれほどの効果をもたらすのか。そこには教育の崇高な理念を反映させた実践は出てくるのか。

いわば、赤ん坊が言語を獲得していく過程を小学校が担うわけである。今まで英語をほとんど話したことがない担任がだ。

あまりにも稚拙な文科省の英語導入。現場に丸投げで責任だけを押し付けることに対して、何の罪悪感もないのだろう。

文科省の役人に一度小学校現場で1年間働いてほしいものである。(文責 東條)

